甲田の裾

KŌDA NO SUSO

第34期生卒業式

3号

退職者　とのお別れ

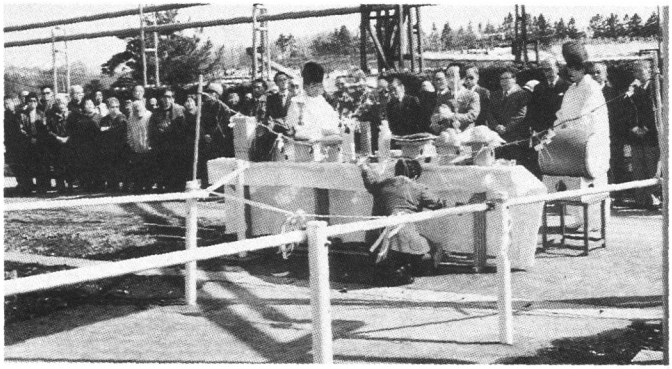
甲田の裾　第3号　通巻512号

目次

式辞……阿部鹿次郎…2
祝辞……小川博…3
第三十四期准看護学校卒業証書受与式にあたって……後藤昭…5
祝辞にかえて……天野慶一…6
祝辞……木村宏子…7
メッセージ……荒川巌…7
お祝のことば……村井香奈…8
お礼の言葉……小山内順子…9
入学式……浜田直美…10
寮生活……柏谷晶子…11
炊飯遠足……三浦稔子…11
バレーボール大会……小山内順子…12
卒業をひかえて……奈良岡小百合…12
資格試験……吉村千加子…13
卒業試験……山田都希子…14
つくしが丘病院実習……八幡真知子…14
進級……板谷春美…15
新治療棟での実習……治部由美子…15
施設見学・八戸市民病院……小倉和子…16
県立中央病院実習……小田桐才子…16
戴帽式……川村裕美…17
予科期……太田久美子…18
施設見学……工藤留美…18
シンガポール・インドネシアの十日間（二）……大高興…26
短歌……白樺短歌会…19
欣求俳壇……村上三良選…22
みちのく集……佐藤静良選…22
明鏡集……鈴木可香選…23
句会……北柳吟社…24
道……長内恵美子…21
身延のかがり火（十一）……野中武祉…31
人事異動……21

本文写真　宮本　五郎・天地　聖一

上　新管理治療棟（南側より）
中　新管理治療棟への渡り廊下
下　新管理治療棟の修祓式



式辞

学校長　阿部鹿次郎

本日ここに第三十四期生の卒業式を挙行するにあたり御多忙の中、多数の来賓の先生方に御列席いただき感謝申し上げます。特に、小川厚生省東北地方医務局長、東北地方医務局大井看護専門官をお迎えすることが出来ました。このことは当看護学校が開校以来、始めてのことであります。生徒達の感激と喜びは勿論のことですが、関係職員にとりましても何よりの励ましであります。有難うございます。

第三十四期生の皆さん卒業お目出度う。先ず、皆さんが、御父兄が二年前にハンセン病療養所附属の当学校を選ばれた勇気に敬意を表します。皆さんが当学校に学び患者さんに接した体験が皆さんの将来に益することは計り知れないものがあります。

皆さんは二年間、教養の課目は勿論のこと、医学、看護学の基礎、臨床について学ぶことに全力投球して来ました。そして、十五人全員がそろって、元気に卒業式を迎えました。更に、全員が上級の看護学校を受験して、早々と、全員が目的の看護学校に合格されました。嬉しさが、更に一しおと思います。重ねてお目出度う。

皆さんのこれからの生き方について、私の平素感じていることを一点だけ申します。「良い看護婦」とは「良い人間」であると言うことです。それでは、「良い人間とは？」　私は「明るい人間」であると思います。どんなに良い環境にあっても、「くらい人」も居ます。どんなに苦しい立場にあっても、「明るい人」も居ます。人の明るさ、先天的なものによるものではありません。その人の心がけによってつくられるものです。苦しみを克服することによって、更に明るさがみがかれます。患者さん達が医師、看護婦に求め、望んでいるのは「明るい人間」です。「明るさ」が彼等の心の「灯火」なのです。

皆さんは、この二年間寝食を共にして来ました。このことは、普通の社会では、なかなか得られない貴重な体験です。そして、その日常の生活の中に、深い友情が、きずなが生まれ、育ちました。友情と友人を大切にして下さい。これからの生涯を、共に助け合い、はげまし合い、又、よろこび合い、仲良く生きていって下さい。

今後の皆さんの御多幸を祈りまして、送別の式辞といたします。

祝辞

東北地方医務局長　小川博

只今校長先生から過分な言葉をいただき、大変恐縮いたしております。皆さんは東北地方医務局と申しましても、講義の中でも余り聞くことはなかったろうかと思っておりますし、現実に学生である皆さんには耳新しい言葉だと思います。私共のやっている仕事は国立病院、療養所の業務がうまく進展をしていくように、充分な看護ができるように、そういう仕事がうまくいくようにお手伝いをすることであります。そういう点で努力をしており、管内に二十四ヵ所の国立病院、療養所がございます。

さい前、校長先生から私がはじめての出席であると云うお話がありましたが、実際、私もこちらに赴任して参りまして国立の看護学校というものを全部、入学式なり、卒業式なり戴帽式という機会をとらえて訪問致したいと念願しておりましたが、大変おくれて、今日はじめて出席するということになり恐縮いたしております。

さて、皆さん方はこの二年間の生活を無事終えられ、ご卒業大変おめでとうございます。皆さんがたは高等学校を出られて大事な青春時代のこの二年間を全寮生活をしながら看護の道を習得すべく勉強されたことは生涯を通じての思い出になろうかと思っております。これらのことも長い人生の中での意義深いものがあろうかとこういうふうに思っております。どうか今後はこの〃出合い〃を大切にされて、日常の生活に潤(うるお)いをもっていただければ大変ありがたいな、とこういうふうに思っております。

又、一つほどお願いをしておきたいと思いますけれども、看護というものが科学的なものがより一層求められる時代になり、業務もそれにつれてきびしさと同時にかなり広範囲な看護が求められるようになりました。でその故(せい)かどうかはわかりませんが、人間関係にとかく不協和音が聞えて来るような気がいたしてなりません。みなさんはここで習得されたことを、今後更に上の学校に進まれて勉学を続けられるわけでありますが、私共は人に接するに、特に患者さんと接するにあたって、忘れてならないことがあろうかと思います。先程の校長先生のお話にもありましたが、私は若干表現が違っておりますが、どうかみなさんは〃人のよろこびをよろこび〃として感じ得る人間、或いは〃人の悲しみを又悲しみとして〃そ

れを理解することが出来るような人間になっていただきたいと思うのです。非常に抽象的な云い方でありますが行うにはむずかしいことでございます。今の世の中は、人のよろこびは他人のよろこびとして全く無関係、人の悲しみは又他人の悲しみで、又全く無関係というような風潮が感じられるのでありますが、このようなことではどうして看護婦として患者さんの苦しみを理解してあげることができるでしょうか。従ってどうか患者さんのみならず、人の悲しみ、人のよろこび、共にそれをわかちあえるような、そういう人間に是非なっていただきたいと強くお願いをしておきます。

又、卒業生の十五名のみなさんを今日まで大事にお育ていただきましたご父兄の皆々様大変おめでとうございます。御卒業の皆さんは又進学をされるようですが、どうかこれから先もよい看護婦さんに、思いやりのある人間になるよう大事にお育ていただくようお願いいたします。本日はおめでとうございます。

ご来賓の諸先生には非常にきびしい環境の中で教育、あるいは実習等をお引き受けいただきまして、お陰様で無事十五名を卒業させることが出来ました。ご協力をこの席をかりて厚くお礼申し上げます。

なお、学校長以下学校職員のみなさんも、いろいろと大変な中を学生達を育ててくれたことを大変ありがたく思っております。

以上とりとめのないことを申しましたが、最後に日本の医療は重大な転換期にさしかかっております。それだけに多くの苦労もこれから先の生活に出合うことになろうと存じますが、今日のこの感激を忘れずに看護の習得に御精進下さい。本日の卒業式にのぞみ、みなさんのご健康とご多幸をお祈りして私のはなむけの言葉といたします。

卒　業　式

第三十四期准看護学校卒業証書授与式にあたって

県立つくしが丘病院長　後藤　昭

皆さん本日はおめでとうございます。また列席の御家族の皆さんおめでとうございます。

祝辞を述べるようにとのお話でしたが、実は私は皆さんに「精神科疾患」の講義をしており、また私の勤務する県立つくしが丘病院で実習をしたということがありますので、来賓の祝辞ではなく、学校の一員として皆さんと一緒に喜びを分ちたいと思います。

さて、「卒業」ということはどんなことでしょうか。

辞書（広辞林第五版）によると「学校で所定の教科・学科課程を学び終えること」とあります。「学校で」とありますので、まだまだやることがあるということを考えておく必要があります。皆さんは全員進学されるとのことですが、更に上級の学校で学習を深めて下さい。更に社会での勉強もあることも忘れてはなりません。

英語では卒業のことをgraduationといいます。辞書（研究社新英和大辞典第五版）によるとgraduationという言葉は、

1. （強弱・寸法などの）度盛り（すること）目盛り（付け）
2. 目盛り・度
3. 〔絵画・写真〕（色調・明暗などの）濃淡度・ぼかし
4. （品質に応じた）階級・等級・格付け
5. 卒業、卒業式
6. 濃縮

などいろいろの意味がありますが、皆さんのこつこつやって来た努力が、今日むくわれて卒業を迎えたということが表現されています。

しかし、卒業というのは修了ということではなく、更に自分を高め、階級・格付けというと一寸変な感じもうけますが、世のため人のために何ができるか、をこれからは問われるということを忘れないで下さい。

いってみれば、今日はスタートの日です。巣立ちの日です。一層の精進をお祈りする次第です。

祝辞にかえて

東奥女子高校長代理　天野慶一

第三十四期生の皆さん卒業おめでとうございます。今日の佳き日にあたり、巣立ち行く皆さんに、次の言葉を贈りたいと思います。

「人々は自分一人の力では社会や組織を変えていくことはできないと思いがちである。しかし、人々は無力なのではなく無力だと思い込んでいるのである。そして何もしない。その結果人々は本当に無力になってしまうのである。」

これは、加藤秀俊という人が書いた文の一節ですが皆さんに大きな励ましを与えてゐるのだと思います。というのも、確かに近視眼的には社会や組織というものは一向に変化がなく、未来永劫にわたって不変であるかのように見えますが、私達が歴史を通じ学んだ事実は決してそうではなく様々な時代に様々な人々によって少しずつではあるが全体として大きく社会も変化をしてきたのです。主観的に自分一人の力をどう評価しようとも私達人間の力で社会を変えてきたのです。そのような可能性を私達一人一人は持っているのです。とすれば自分自信を変革しようとか、より高い能力を獲得していこうというときに自分の中で、それは不可能だと思い込んでしまうことだけが障害になるのであって、自分の（人間の）可能性を信じていく限りそれはどこまでも追及できるものなのです。

私の記憶では皆さんとの授業のなかでは一度も宿題はださなかったと思います。それで最初で最後の宿題として「可能性の追及」という課題を与えたいと思います。いつまでと期限の決められない課題ですが、皆さんがそのような姿勢を持ち続けてくれることを期待したいのです。

最後になりましたが皆さんのこれからの活躍を期待して私の挨拶を終わります。

祝辞

日本看護協会青森県支部　支部長　木村宏子

ようやく春のきざしがみえ初めてきた今日の日に、目出たくご卒業されましたみなさまに、日本看護協会青森県支部会員四千四百五十名を代表して、お祝いの言葉を申し上げます。

ご承知のとおり、わが国には、世界で第一位の長寿国となりました。喜ぶべきことですが、半面、長命のための老人病も多くなりました。また、成人病の増加、慢性疾患の多発など加齢にともなう健康問題も多くなっております。また人口構成の変化による幼少人口の少なくなる傾向も出ております。

人の一生のどのレベルでも、保健婦、助産婦、看護婦、准看護婦の働きかけを必要とします。この状況のもとに、社団法人日本看護協会は資質を高めて保健医療の向上をはかり、国民の健康水準を上げたいと念じ、地域における看護活動をひろげるための研究や、医療機関における看護の質的な充実をはかるための研修をすすめております。その他国際的視野に立った研究、事業を全国三十万名の会員と、ともに推進しております。

このときに、若々しく希望にもえたみなさまを、看護の世界にお迎えすることができるのは、本当にうれしく存じます。これからは、私達の仲間としてお互いに協力をし、地域住民の健康の保持、増進のために努力して頂きますようお願い申しあげます。

みなさまのご活躍とご多幸をお祈りし、祝辞といたします。

メッセージ

前学校長　荒川巖

第三十四期生の卒業生の皆様、希望に充ちた門出をお祝い申し上げます。

皆様が入学された一九八五年の年の五月二十八日に、東京から高橋三郎先生をお招きして、皆様にこの教室で、

「年若き女性に望む」というお話をして頂きました。覚えておられるでしょう。その時園内の患者さんには「老人の信仰」、青森市では「家庭、教育、職業」というお話をして頂きましたが、これらの三つのお話を含めて八つの講演が「戦後四十年」という一冊の本になって出版されました。「年若き女性に望む」というお話の中に先生はこう語って下さいました。

「ほんとに患者を大事にするためには、自分自身が大事にされていなければならない。自分の心の中に愛の喜びが溢れていないで、人を愛することはできないからです。」

そして最後に、

「どうか皆さん、自分を大事にして、病院の中に喜びと望みの花を咲かせるような人として、成長して下さい。」と結ばれました。

私も高橋三郎先生と同じことばを皆様に送りたいと思います。

皆様、どうか身も心もお健やかに、どんな立場に置かれても、おひとりおひとりが、それぞれの立場で明るく清く、女性の使命を立派に全うされますよう、豊かな人生を拓り開いて行かれますよう、お祈り申し上げます。

お祝のことば

在校生代表　村井香奈

ここ雪深い松丘を吹く冷たい風もようやくおだやかになり、日増しに春めいてきた今日のこの佳き日、卒業されます皆様、御卒業おめでとうございます。

思いおこせば四月、右も左もわからず、入学してきた私達に学校生活、寮生活における看護学生としての態度、人間関係の大切さ等をやさしく教えて下さいました。そして初夏を思わせる六月からは、つらく、きびしいバレーボールの練習がはじまりました。共に汗と涙を流し、くじけそうな私達を常に励まして下さいました。又、炊飯遠足では、ゲームを通し一、二年生の親睦が深められ、すみきった青空の下で一緒に作った豚汁の味は今も忘れられません。

念願の戴帽式を終え、戸惑う私達に患者さんとの接し方、観察の方法や記録の仕方等、適切にアドバイスして下さいました。園外実習中の皆様は、朝早くから夜おそくまで勉強し、実習に対する厳しさを私たちに身をもって示して下さいました。

卒業生の皆様、一年間本当にありがとうございました。みな様の姿をこれからみることができなくなるのは、とても心細くさびしく思いますが、私達もこれからは皆様

に負けぬ様、しっかり学びたいと思っております。
皆様は、それぞれの道に進まれることになりますが、松丘での想い出を胸に、みな様が求めている看護婦をめざし、一層励まれますことをお祈りし、お祝のことばと致します。

お礼の言葉

卒業生代表　小山内　順　子

雪深いここ松丘にも、ようやく春の日差しがさしはじめました。このような佳き日に三十四期生十五名がそろって卒業できますことを大変うれしく思います。
今日は、私たちの為にこのような盛大な式典を催して頂きありがとうございました。
振り返りますと二年前、希望に胸をふくらませ入学いたしました。しかし、初めて学ぶ看護の勉強にはなかなかなじめず、更に初めての寮生活の厳しさに何度悩んだことでしょう。そして、少し慣れた五月下旬よりバレーボールの練習が始まりました。放課後のバレーボールの練習は辛く、特に基礎体力作りの期間は、今まで味わったこともない程辛いものでした。それに加え予科期の試験が始まり、睡眠をとる余裕さえありませんでした。何度この生活から逃れたいと思ったことでしょう。しかし入学の時の誓いを思い出し、クラスメートとお互いに励まし合い、この期間を乗り越えました。苦しい予科期でしたがこの期間努力することの尊さと耐えることを学んだように思います。
夏休みを終えた八月末、待ちに待った戴帽式が行われました。沢山の苦労の末に頂いたキャップと白衣も身につけうれしさで一杯でした。が、反面実習をきちんとやっていけるのか、という不安もありました。実習が始まり、毎日自分たちなりに勉強しても満足のいく実習はなかなか出来ませんでした。この期間を振り返りますと、始めのころは緊張してしまい、思うように動けず、又実習に慣れてきた時は、あまり進歩のない自分に腹立たしさを感じ、何度くやし泣きしたことか知れません。予習して実習に臨んでも教本通りにはいかず、特に個別性の看護をするように指導されてもなかなか出来ませんでした。実習はあせっても何も学べません。確実に一つ一つ物事を把握することが大切なのだということを知り、婦長さんをはじめ看護婦さんからアドバイスを頂き、少し時間がかかりましたが一つ一つ確実におぼえることができました。本当にありがとうございました。
二年生の九月から、県立中央病院、県立つくしが丘病院での園外実習が始まりました。一日の流れが早く、流れに流されず積極的に実習を行わなければ何もできないこと。健康でなければよい実習はできないということを

学びました。くじけそうになる私たちを時には励まし、時には厳しくご指導下さいました婦長さん、主任さん、看護婦さん本当にありがとうございました。又、園外、園内での実習を通して学ばせて頂いた患者さん方、ありがとうございました。

このように辛い事、苦しい事が沢山ありましたが充実した二年間でした。今こうして無事卒業できますのも、学校長先生、副学校長先生、諸先生方のおかげです。本当にありがとうございました。

今私たちは、それぞれの学校へ進学いたします。今思いますと、白衣にあこがれこの学校に入学したように思いますが、この二年間で看護の道の厳しさを知りました。私たちは、これからここで学んだ事を土台に十五名その厳しさに再び立ち向いたいと思います。

一年生の皆さんと過ごした一年は、とても短かく感じられました。辛かったバレーボールの練習、炊飯遠足での豚汁作りやゲームをしたこと。寮での一緒の生活。短い期間でしたが園内での実習、と、あわただしい中にも一緒に過ごし、なぐさめられたり、励まされたりと楽しい一年でした。私たちは先輩として何も出来ませんでした。皆さんは残る一年、苦しい事、辛い事を乗り越え、その中から喜びを見つけて下さい。

最後に、学校長先生、副学校長先生ならびに諸先生、在校生の皆さんのご健康と母校の発展をお祈りし、お礼の言葉といたします。

入学式

第34期生　浜田直美

二年前の昭和60年4月11日、私達15名は入学式を迎かえました。まず松丘に来て一番驚いた事は4月の中旬だというのに道路にまだ雪が残っている事でした。当然、雪はないものと信じ込み靴でやって来た私でしたが、靴はびしょびしょになってしまい、なんて寒くて寂しい所なのだろうと心細く思ったものです。又、着古したヨレヨレの高校の制服を着た私達に比べ、真っ白い白衣に身を包んだ先輩たちはとても眩しく、私も早く白衣を着たいなあと思いました。

入学式は小さな会場でしめやかに行なわれました。新入生一人一人の名前が呼ばれ、みんなが学校長先生に入学を誓いました。私の名前も呼ばれましたが、とてもドキドキしとにかく看護婦になる為にこの二年間を頑張ろうと決心しました。入学式の思い出と言っても、不安と緊張であまり良く覚えていませんが、あの時の感動は今でも強くやきついています。又、教務の先生はじめ来客の方々まで白衣を着ておられる方々ばかりで、さすが看護学校の入学式だなあと妙に感心したのを覚えています。

二年と一言で言うと短かいようですが、私にとって初めての事ばかりで、又泣いたり笑ったりと色々な出来事

があり思い出もその時々にたくさんあります。入学したのがはるか昔の事のようでとても懐しいような気がしますが、どこへ行っても入学式の時のような気持ちを持ち続けて行きたいと思っています。

寮生活

第34期生　柏谷晶子

昭和60年4月11日学校に入学と同時に入寮することとなりました。たくさんの荷物をかかえ寮に着いた時、この荷物と同じくらいの不安がありました。初めて親元を離れる淋しさ、初めて顔をあわせ一緒に生活する人達とうまくやっていけるか、看護という未知の世界、次々と頭の上をよぎっていきました。しかしそれからの不安も、友達ができ時間が経過するとともに薄れていきました。

寮生活の中で一番困ったのは〝時間の使い方〟でした。朝6時にガランガランと大きな音をたてて鳴る鐘、それとともに飛び起きて部屋の掃除をする。家にいる時は6時なんてまだ熟睡している時間なのにと思いながら掃除をしていました。それは未だに同じです。その他朝礼の時間、○○の時間、××の時間とほとんど分刻みで時間が決められていて自宅で時間の制約なんて受けずに毎日をすごしてきた私にとってはかえってどうしていいかわからなくなっていました。それは私以外の人達も同じだったようで入学して少しした頃「時間の使い方」などという討議をした程です。それでも少しずつ慣れ、今ではもうあまり気にならなくなりました。

二年間の寮生活で学んだことは集団生活をしていくうえでとても大切なことなので忘れずにいたいと思います。そして二年間を一緒に寮生活をしたみんなのことも、忘れずにいたいです。

炊飯遠足

第34期生　三浦稔子

毎年、なぜか炊飯遠足の日は、雨が降るというジンクスがあり、一年生の時も楽しみにしていたのとはうらはらに、雨降りのため、室内で炊飯遠足でした。

しかし、二年生の時は、行いがよかったのか、最高の天気に恵まれ野外での豚汁の味もかくべつでした。今年の遠足は、八甲田にある、後藤伍長の像の前でひと休みし、かやの茶屋へ行くといったコースでした。頂上に、登り後藤伍長の像の前で見た景色には、感動しました。まだ、八甲田山に雪がほんのり残り、まるでアルプスの山々に囲まれているようでした。

青森市内の町なみも美しく青い空と海は、一生忘れるこ

とはないでしょう。炊飯遠足では、一、二年生とまた先生方ともグループを作り、一致団結でサラダ、豚汁を作り、お互いどのグループの豚汁がおいしいかなど、食べ歩きをしたのが印象に残っています。ゲームでは、先輩、後輩もなく友達として、お互いの親睦を深めることができたように思いました。
毎日のあわただしい日々の中に、春の風を注いでくれたこの炊飯遠足を楽しい思い出の一つとして大切にしてゆきたいです。

バレーボール大会

第34期生　小山内　順　子

毎年行われる行事の一つに青森県准看護学生親睦バレーボール大会があります。それに向けての練習が5月下旬より始まりました。一年の時はちょうど寮生活に慣れ学校生活も徐々に楽しくなってきた頃にこのバレーボールの練習が始まりましたので、「一難避って又、一難」という感じでした。基礎体力訓練はとてもつらく、コーチと仲間についていくだけで精一杯でした。試合が近づいてきた7月には、予科期の試験も加わり、この上なくつらい日々でした。しかし、やりぬいてみて自分自身に何か大きな自信を持つことができました。

2年の時は、コーチが不在の日が大半で、今年のバレーボールの練習はどうなるのだろうという不安で一杯でした。しかし、キャプテン・マネージャーを先頭に皆が協力的で、昨年以上にチームワークがよかったように思います。大会でも、準優勝と好成績を残すことができました。あの頃を振り返ってみると勉強もバレーボールの練習もよくしたし、充実していたように思います。
辛い思い出ばかりのような気がしたバレーボールの練習も、今では私にとって一番の思い出です。この先、バレーボールで得た大きな自信を励みに、くじけずがんばっていきたいと思います。

卒業をひかえて

第34期生　奈良岡　小百合

春、入学式を迎え十五名全員が同じゴールを目指し、皆同じスタートラインに立ち、そしてゴールを寸前にした現在後ろを振り向くといろいろなことが思い出されてきます。
この二年間、准看護婦としての知識・技術を学ぶために講義を受け、臨床場実習では講義で学んだことを実施しましたが、実際には思いどおりに実施することができず、教務・婦長さん・看護婦さん方よりアドバイスを戴

いたり、又お互いに自分の知っていることを教えたり助けあって乗り越えてくることができました。
しかし、正直に言うと実習に行きたくないと思った日もありました。自分の力が、実習時間に思いどおりに発揮することができなかったり、患者さんとのコミュニケーションがうまくとれなかったときなどです。
いままでは殆どのことを受け身の状態で行なってきた方が多かったようですが、これからは自分自身の考えをもち積極的に進んでいきたいと思います。
四月からは、また皆それぞれの新しいスタートラインに立ちます。途中、つまづいて転んだりすることがあるかもしれませんが、ここでの二年間に学んだことや苦しかったことを思い出せばきっと乗り越えていくことができると思います。

資格試験

第34期生　吉村　千加子

2月22日は、私達の目標である。准看護婦としての、免許を得る為の、資格試験でした。
資格取得の為に、この学校に入学し、いろいろ苦労してようやくこの日を迎えたと思います。
資格試験を意識しはじめ、問題集を一問一問解いていくと、これは何だったか、あれはどうだったかと、忘れていることが多く、これではだめだと焦り、私は落ち込んでしまいました。
私だけわからないのでは……と思い込み自己嫌悪におちいった私を、周りの友達、先輩、先生方は励まして下さいました。
周囲の励ましもあり、資格試験に向けての本格的な勉強をすることができたように思います。
資格試験前日は、落ち着くことだけを考え、明日は全力で臨む為、普段より早めに布団に入ったのですが、なかなか眠れず、時計の音が気になり、焦りと不安が一緒におしよせてきて、頭痛が私をおそいました。
試験当日、とにかく落ち着いて一問でも多く解答しようと思えば思う程あがってきました。
こんなことならもう逃げ出してしまいたいと思いました。が、松丘で学んだ2年間をここで試してみようと強気になることにしました。
結果はどうであれ全力を尽くつもとを心に決め、約6時間頑張りました。
試験を終え思ったことは、専門職につく為の資格取得は、より多くの努力が必要なことを痛感しました。
資格取得できたら免許に恥じないような看護婦になりたいと思います。また、これからも自分なりに努力し、前向きな姿勢で頑張って行こうと思います。

卒業試験

第34期生　山田　都希子

冬休みが終わってからの毎日は、体験録発表、卒業試験・資格試験、進学コースへの受験と、本当に忙しい日々を送り、文字通り時間におわれていました。その中でも一番始めに行なわれたのが卒業試験でした。卒業試験とは、この2年間で習得した知識を試験という形で評価されるのです。まして、卒業に関連しているとなると誰もが不安に感じると思います。私も、そんな想いで試験にのぞみました。しかし、試験が進むにつれて、不安や緊張より疲労の方が増してきました。テスト勉強をしながらも気持ちだけが先走り、思うように勉強がはかどりませんでした。そんな泣き出したい心境の日々でしたが、友人とお互い励ましあったり、問題を出しあったり頑張った結果、3週間に渡った30教科余りのテストが無事終了できました。いざ、試験が終わると気が抜けた様な感じもありました。やはり、一段落終えることができたことがうれしくてたまりませんでした。

何回も投げ出したくなったこの2年間を最後までやり通すことができました。それが徐々に自信へとかわっていき、これからの困難な出来事に立ち向かっていけるのではないかと思っています。

つくしが丘病院実習

第34期生　八幡　真知子

雪が降り、寒くなった12月、最後のグループとして、つくしが丘病院での実習がはじまりました。

精神科ということのみで、今までの実習場とは、まったく違う不安、緊張感につつまれての実習でした。つくしが丘病院では、開放病棟、閉鎖病棟で実習し精神科看護を学ぶことができ、又、教本に書かれてある鍵の重要さ、保護室の目的など再確認できたことに付け加え、開放病棟、閉鎖病棟それぞれの雰囲気を知ることができました。

つくしが丘病院を実習することにより、精神科という言葉に対しての変な先入観（恐怖観、差別的考え等）をなくすことができ、又、心の病の看護は看護者の言葉、態度が大きく影響することなどが、とてもかんじられました。これから看護婦を志すにあたって、患者さんにプラスになるように接し方ができるようになりたいと思います。

進級

第34期生　板谷春美

先輩方の生活を見、実習について聞き、勉強を習い、一年生という時期を過ごしてきました。入学したての頃、私には先輩方が大変たくましく見えたものでした。

その先輩方が三月に卒業され、それから間もなくして私たちは春休みを迎えました。終えて出て来ると二年生になっていました。振り返ると長い一年間でした。一年生の頃、私には親しい友人もおらず、授業は難しく、実習は辛く、これで二年間つとまるものであろうかと、何度も〝自主退学〟を考えたものでした。しかし、徐々に開き直り、それと並行して友人ができてきました。そうやってどうにか一年間を過ごしました。進級の頃には、あと一年で卒業できるという気持ちが強まってきました。寮の生活にも実習にも、食事にも慣れることができ、ようやく寮生活が楽しく思えるようになったのも、ちょうどこの頃でした。一年の間に、私の気持ちも周囲も、多くの事が大きく変化したのです。

私は進級と同時に先輩になりました。新一年生の目には、どのようにうつっていたでしょうか。やはり、ここで一年過ごした事で、たくましく見えたでしょうか。

一年生の時は、何もかもが苦労でしたが、二年生になって新一年生の面倒をみながら、友人ともうまくやりながら、私は残された一年間を有意義に過ごそうと決心したのでした。

新治療棟での実習

第34期生　治部由美子

二年ほど前から建築中の新治療棟がいよいよ完成し、私たちは、卒業を間近にして、最後の実習を新しい治療棟で行なうことができました。

二月に入り、古い治療棟から新しい治療棟への移転が職員と学生総出で行なわれました。荷物を運びながら、新治療棟へ足を踏み入れるたびに、建物の明るさに魅かれ、この明るさに負けないくらい、自分も明るく実習しようなどと思ったものです。

実習は、残りわずか3週間ですが、その3週間が病棟実習の人はほとんど縁がない中で、私は治療棟実習のみなので、ラッキーだったと思います。

新しい治療棟での実習が始まった頃は、自分もまだ慣れない中で、患者さんに他科の場所を聞かれ、わからないから、自分も一緒にさがすといった具合いでした。又戸惑いながらも、患者さんにも明るさが感じられ、その明るさにつられて、自分でも前よりよく声が出るように

なり、充実した実習をすることができました。
去年の夏休み前、もしかしたら、私たちは、新治療棟での実習は、できないかもしれないから、とまだ未完成の治療棟の中を見学させて頂いたことがあり、ここでの実習は無理なんだ、と半ばあきらめていたのに、最後になって、たった3週間でも実習することができて本当によかったと思います。

施設見学・八戸市民病院

第34期生　小倉和子

私達、第三十四期生は、二年の夏季休暇終了後、施設見学の為、八戸市民病院を訪問しました。
後に青森県立中央病院での実習をひかえていましたので、総合病院とはどのような所か、ひとつでも多く見学し、学びたいという気持ちでした。しかし、初めて見る総合病院の外来患者の数、ベッドの数、設備の万全さにただ目を見張るばかりでした。
各科を見学させて頂きましたが、人工透析室では、何時間も同一体位で透析を受ける患者さんを見、未熟児室では、保育器の中で必死に生きようとがんばる児を見ました。どの場面も今までに見たことのない患者さんの姿でした。そしていつもそこには、必ず優しく暖かく患者さんを見守る看護婦さんの姿があったことを今でも覚えています。
総合病院というと、つい設備が整っていて色々な機械があり、看護婦と患者のふれ合いがないように思えます。しかし、外来において、どの科を受診したら良いかわからない患者さんの為に、案内の看護婦がおり、どの科が適当であるか教えてくれるのです。
総合病院だからこそ、至る場所に患者さんと看護婦のふれ合いの場があるのだと学びました。
これから私達は、准看護婦の資格を得て、更に進学コースへ進むわけですが、優しい笑顔の絶えない看護婦を目ざしがんばって行きたいと思います。

県立中央病院実習

第34期生　小田桐才子

朝は、ほんの二十分程度の時間で身じたくを済ませ、荒ただしく出かけていく。日が暮れる頃に帰って来て夕飯を食べ、入浴し夜遅くまで毛布にくるまって勉強をする毎日…。
そんな先輩方を見て一年の頃は、こんな私でも県病実習を乗り切ることができるのだろうか。実習前はそんな不安ばかりでした。県病実習を控えた2年の夏休みは、

そのせいかあっという間だった様な気がします。
実習が始まると今度は不安が緊張に変わり、最初の頃はとにかく緊張のしっぱなしで思う様に動けず、又見るもの触れるものが皆初めてのものばかりで、とまどっていましたが、その反面とても新鮮で興味もわいていきました。初めて手術患者を受け持ち、手術前後の看護を経験できましたが、術後の回復の早さ、教本通りの症状とそれに対しての援助、コミュニケーションの大切さを身をもって学ぶことができました。
実習中はとにかく無我夢中で、一日があっという間でした。帰りのバスでは殆どの人がいつの間にか眠ってしまっているという状態でした。そんなこんなで県病実習もあっという間に終わり、自分にもやってこれたという安心感と共に自信がついた様に思います。これから進学先ではまた、困難にぶつかることがあると思いますが県病実習で学んだことを忘れず、踏み台にしてゆきたいと思います。

戴帽式

第34期生　川村裕美

ここの学校に入学し、まず入学式で先輩方の白衣姿を見て、自分でも近い将来に着用するのだと思うと、期待と、希望に胸をふくらませた日のことを、今でもはっきりと覚えています。
予科期には、戴帽式を目標に、幾度もくじけそうになりながらも専門教科を学び、看護とは何か、理論的なことを知りました。
いざ戴帽式を迎える前日の夜になると、期待と共に、初めて親もとを離れ、人間とは何かなど今までは、考えもしなかったことを討議したりした。予科期のことを、思い出し、何とも言えない気持ちでなかなか眠りにつくことができませんでした。
戴帽式に入り次々に名前が呼ばれ、自分の順番が近ずくと胸の鼓動が高なってきました。自分の名前が呼ばれ反射的に返事をし、礼をして総婦長さんの前に進み、再び礼をし、キャップをいただきました。ナースピンを止めるピーンという音で、ああ私もあこがれの戴帽したのだと実感しました。
次いでキャンドルを受け取り、炎を見つめていると、がんばらなくてはという気持ちと共にやれる分の最大限まで、看護の道をいそしもうと決意しました。それと同時に何か言いしれない感激をし、涙が頬を伝わってきました。
今ではすっかり自分の白衣姿は見慣れてしまいました。しかし、時々自分の白衣姿を振り返り、戴帽式で決意したことは、忘れないようにしていきたいと思います。

予科期

第34期生　太田　久美子

二年前の春、松丘に入学した時、ひとつの建て物の中で、見知らぬ（これからなるだろう）友人と先輩と、一緒に毎日を過ごしていかなければならないのかという期待と不安で一杯でした。みんなと、うまく協調していけるだろうかという不安と、何か楽しいことが待ちかまえていることだろうという期待と。しかし、現実はそんなに甘くはありませんでした。まず、最初に悩んだのは、寮生活での人間関係です。十人十色というけれど、人と人とが、こんなに、うまくいかないこともあるのだと、思い知らされました。次に、つらかったのは、バレーボールの練習と、戴帽できるか否かが決まる、テスト期間でした。厳しいバレーボールの練習のあとには、疲労を覚えながらのテスト勉強、布団も敷かずに、夜を過ごしたこともあります。他にも、苦しかったことは、沢山ありましたが、ひとつひとつ上げていると、きりがありません。そして、苦しかった反面、やはり、少しは楽しかったこともありますが。

この二年間は、休むことなく毎日がつらかったけれど、予科期も、大変な時期でした。しかし、予科期をのり越えたことによって、人と接していくのに、何かを学んだような気がします。決して、無駄ではなかったと思います。これからも、この思い出を、大切にしていきたいと思います。

施設見学

第34期生　工藤　留美

昭和60年11月12日、私達は南郡浪岡町の国立療養所岩木病院の施設見学をしました。

岩木病院では、慢性小児看護の見学実習と慢性小児の看護に関係している医療従事者の役割について知るという目的のもとで見学しました。

小児の慢性疾患のうち喘息やネフローゼ、腎炎、慢性心疾患や筋ジストロフィー、重症身心障害児の看護や特殊な設備、病棟等について説明をして頂き、喘息体操を行ったり病棟で安静中の児や筋力トレーニング中の児とコミュニケーションを持ったり重症身心障害児への食事介助を行ったりしました。

同じ慢性疾患治療中の保養園内の患者さんと同様で毎日大変な根情がいるのだと感じました。

又、慢性疾患の児の特徴では長期入院の為愛情不足になりがちで、家族との接触が少なく問題行動がみられる事もあり、年齢から考え正しい躾により人間性を身につ

けなければいけない大切な時期なのでその点を配慮した環境が整えられ看護が行われていました。
看護者全員が協力しすべての患児に平等に接しているが、一人一人個人差があり限度もあるとのことで改めて小児看護の難しさを知りました。
私たちがネフローゼの病棟を見学した時の事です。
殆どの児が通学中だったのですが入学前の児が二人いてとてもうれしそうに、持っていたタオルで私達をたたくのです。
はじめびっくりして
「痛い、どうしたの？」
と、話すと一時やめてまたタオルを振りまわしていました。
たたくという事はいけない事です。でもそれが私達を歓迎している精一杯の意志表示なのだとわかるとかわいらしさと共に児のさびしさが伝わってきました。
その児は、私が帰る時に自分で折った奴さんの折り紙をくれました。
角はきちんと折れていないのですが、そのままで大切にしまっておこうと思います。
これからも看護婦になる為勉強を続ける訳ですが、健康に気をつけて頑張りたいと思います。

短歌

白樺短歌会

佐藤一祥

眼科室へ向ふ廊下の人混みに吾等は白杖に床たたきつつ行く
盲導鈴のひびき遠くて吹雪朝治療に通ふ歩み捗らず
捗らぬ歩みの吾に声かけて雪路を友はみちびきくるる
視力なく歌のメモすらできぬ吾が日日残されてゆく思ひする
故里を病み離りきて五十年七十九才の吾が生思ふも

矢島忠

常のごと勤めに出で来る君もまた心臓不整を患ふひとり
寮ごとに〆縄張りて正月を迎へし風習もいつかとだえぬ
年末の掃除は妻に指示されて八畳一間の煤はらひゆく
真夜さめて暗がりに歌をかきとめしがメモ帖の文字判読し難し
離り病みこの療園に住み古りて百余の友の賀状をもらふ
不整脈も馴れてしまはば大事なしと入院予約を取り消していふ
去年の秋送りしりんごが最後となり逢ひがたかりし叔母の訃を聞く

松永不二子

生きてゐる如く笑顔にひょっこりと来さうな感じ今日一周忌

処女のまま逝きし恵美さんにふさはしく手向くる白百合
薔薇かすみ草
沓下は歳より明るきが魔よけになると店舗の主は朱きをすすむ
この儘ではき得ぬことを惜しみつつ毛のズボン下義肢の方を切る
添へ書きにあまたの安否知り得たる賀状今年も大事に蔵ふ
入園の長きはわびしわが生家に婚礼有りしも人伝てにきく

加賀谷　幸　蔵

年の暮小さき部落の媼逝く明治は更に遠くなるのみ
老づきて離さず持つは老眼鏡こうやく目薬も常に欠かさず
義歯毀れ斯くも不自由なるものか慣れは異物も身体の一部
過疎部落の総会に集ふ顔ぶれは若き等は少なく意見も乏し
きのうまではしゃぎし孫等のゴム沓が狭き玄関に無造作に脱がれて
氷雨降りて孫等が造りしかまくらも雪のだるまも泣き顔に見ゆ
静まりし眠りを覚す除雪車に起され朝の除雪に汗かく
朝々に新聞配達人は同じ刻除雪すわれと会釈交して
用便を終へカーテン開き窓越しに雪を確かめ夜床に入りぬ
勤め人も通学の子も居らねども雪降りし朝は心ゆるみなし

滝　田　十和男

風吹けば木は

風吹けば木は木のつとめあるらしく葉を撒き散らす冬の杉森
雪よろう森のいずくに宿りしか吹雪やわらげ初鴉啼く
吹雪くなか淋しくなれる鴉らか声あげて翔ぶ森移るとて
今啼きし鴉のこえを聴きしかと呟やく妻は故事を信ずる
雪のふる日を重ねたる森の穂の疲れしさまに風に揺らげる
目に映るものみな雪をいただきて聖堂の屋根の十字架まで
病むほどに周りに積もる雪さえもひとにゆだねてこの冬も生く
雪は降れ氷垂は太れ森に棲む鳥もときには軒端うろつく
しがみつく軒の氷垂を落しゆくヤッケの顔のなかなか美男
太りたる氷垂叩けど折れざれば棒振りざまに掛け声洩らす
ささらなす舌の乾けば滲む血の唇より洩るる吾が現身を
寒ければ早く寝よとぞ今宵また同じ言葉を吐くも詮なし
潑剌と生きたる日などありしかと思えり若き客を帰して
雪道を来る人もなく雀らが吾がもの顔の日は短かくて
夕まけて海にと戻る白鳥の律儀なさまに空を啼きゆく

人事異動

退職者氏名（昭和六十二年三月三十一日付）
佐々木貞喜（医事係主任）着任・昭和三五、二、一日
中谷粕太郎（車庫長）採用・昭和二六、一一、一〇日
神　テル（補導主任）採用・昭和三八、二、一日
依田　安子（〃　〃）着任・昭和四七、七、一日
（賃金職員）
今　フミヱ（寮　母）
木村　清吉（洗濯夫）

昇任者氏名（昭和六十二年四月一日付）
秋村　代芳　医事係主任
石山　肇　車庫長
木原　照子　看護助手主任
増川　サワ　〃　〃

採用者氏名（昭和六十二年四月一日付）
楠美　有里（理学療法士）
中村　誠一（運転手）賃金職員より
田中　昭子（看護助手）〃　〃
富谷　敏男（〃　〃）〃　〃
（賃金職員）
穐元　せち（看護助手）
福士　美紀（〃　〃）
吉崎　昭人（作業手）
石田むつ子（准看護学校事務補助）
須藤　清一（看護助手）（昭和六十二年四月十六日付）
前田　英明（事務補助）看護助手より

配置換者氏名（昭和六十二年四月一日付）
白戸　ユキ（教　官）岩木病院婦長へ
安部　光子（教　官）岩木病院婦長より
（賃金職員）
中村輝代栄（洗濯夫）作業手より

道道

長内　恵美子

道の基本は大自然の水の流れと同じだと思う／生きるにも自然に逆らうことなく／課題を決め具体的に順序よく相手の心をとらえる／希望のモデルでありたい／常に相手の内面／心の動きを良くとらえる／教わる人の立場を理解する事によってヒントを与える／気を配ばる／これも愛情一筋につくせばこそである／それすなわち思いやり／注入的／ハッパ式／決めつけられると挫折／会話はこれで／とぎれてしまう／……と云うことは／……だとすれば／と考える／知能を開き／理解し相手の心の内面を学ぶ姿勢／納得し温く見守る／太陽のような心で情け深く引きつける／和に解けこむ様／成長してゆく心／透明ガラスの様に澄みきった空の色／明るく朗らかなみちを歩みたい……

俳句

欣求俳壇（一月・二月分）

村上三良選

麻痺の手にペン握らせて賀状書く　田山陽司
療園も世の外ならず師走くる
雪晴れて弱視の視野のただ眩し
杖すでに吾全身に春を待つ　志村満
白鳥の声も少なき大吹雪
春立ちてスズメの声も増えし如
雪こぶの杖トントンとつき落とす
なつかしき納豆餅の三日かな　平山幸運子
よどみなき小川の流れ芹青む
春風や糸を限りの奴凧

俳句

みちのく集（一月・二月分）

佐藤静良選

霜柱麻痺の手深くポケットに　田山陽司
移りきて日浅き煤を払ひけり
雪の道白杖たよる身となりし
療園に教堂三つクリスマス
玄関に室花売りや日脚伸ぶ
春待たで何故に急かるる旅ならむ
風雪に杖しかとつき初詣　志村満
初風呂につかりて思う老母のこと
今年又雑煮を祝う幸せよ
配られし賀状つぶさに読みもらう
白鳥の親仔連らし雪晴るる
杖さきの雪こぶ落としくつを脱ぐ
句を添へし師よりの賀状有難し　平山幸運子
歌留多読む声も明るし松の内
故里の梅咲く頃と思ひ臥す

一月・二月句会

初風呂を浴びて心もあらたまり　平山幸運子
句を添えて届く恩師の賀状かな
吹雪く日は臥して素直に診て貰う
橇ひきて坂登り行く二人の子　志村満
沼凍てて白鳥の群旋回す
凍て返る雪路を杖ゆっくりと
福袋今年の福を買ってくる　豊崎小石
湯豆腐や外はしんしんと雪積る
初売りの福の袋の大きかり　田山陽司
花芽とは異なる芽がでアマリリス

川柳

明鏡集

鈴木可香選

茅部ゆきを

無為徒食曲指の爪がよく伸びる
名所の民謡が刷られた箸袋
老い二人欠伸うつして日が永い
雑居の灯守る目を覆い耳を覆い
したたかに生きて来ました冬の蝿
老い二人北風小僧窓叩く
老い二人言葉が欲しい雪が降り

高野明子

一日を充実させる祈りの座
一善を心にかけて丸く居る
介添えも氷雨に濡れてゆく聖堂
雪みちをぬかるみにする寒の雨
白鳥が和む餌づけの小さい沼
戸を操れば心すがしい銀世界

藤久悦

幼鳥に寄り添う姿親子なり
パン屑で白鳥と人とが和み合う
白鳥を数えて今日の糧をきめ
葦の根をつつく白鳥餌を求め
雪しんしん白鳥の白さへ降り止まぬ
保護色の兎追われる身の構え

遠藤芳富

生きるだけ生きねばならぬ寝たっきり
胸あけて話せば判る丸い唇
病む一人ベッドの窓へ冬の月
お互いの無事を届ける年賀状
病人の笑顔太陽とも思う

猪狩子面坊

聖書解けて炎える祈りへ寒椿
慈父からの賀状へベッド座りかえ
ラッセルに謝すカラオケの戻り道
くすり湯の湯気に膝折る寒の冷え
初春を喜ぶ影に散る運命

鎌田娘雀

玩具屋に目立つ兎の縫いぐるみ
初詣で賽銭箱にみる不況
賽銭を聞きつつ祈る初詣で
寒水の五臓六腑に浸みる朝
歳末を目ざし今年も小銭貯め

小寺草人

想い出を開く小箱の古いふみ
発表へそんな筈無い声を呑み
孤児帰国身内に会えぬ涙溜め
一と言が多い男へ座が白け
ひとり歩き出来てうれしい病み上り

（職員）長内恵美子

姑の言葉を信じ幸を待つ
猛吹雪辛い早出の看護助手
縁あって来た子育てて十五年
親泣かせ子等の性格みな違い
ユーモアな放屁家中笑わせる

大橋やす

子等の呼ぶ火の用心へ寒夜更け
賑やかなうちが仕合せ子沢山
良い夢を綴り惜しまれ若く逝く
嫌なこと忘れ希望へ除夜の鐘

平山徳生

風邪に臥て看護婦の手の温み知る
買い出しの昔を偲ぶ余剰米
母の忌へ今更親の有難味

〔選後に寄せて〕

こうして皆さんの作品を拝見していると、五十年近い、昔の全盛時代が偲ばれる。私も三十代で髪の毛も黒く房々していた。選者も一人逝き二人逝きして、私一人が生き残った。有難いような物哀しさを感じる。八十三歳になって、頭も、眼も、足も達者でいられる私は日本一幸せ者で

す。かつて五十名近い患者の応募のあった明鏡集も十名前後になった。そして患者で残っていてくれるのは、茅部ゆきを、遠藤芳富、猪狩子面坊、高野明子、鎌田娘雀、藤久悦さんの六、七名になった。今年の賀状に東京都へ移った原七星さんと、前の園長荒川巖先生が旭川市から下さった。今集には山野辺昇月、太田千秋さんの作品が見えなかった。健康を自負している私も、十一月心臓と動脈硬化で二度倒れたがもう大丈夫です。通院して薬は飲んでいるが心配ないとのことです。年齢の関係で、白内症が嵩じて来たので、目下有名な藤田学園の眼科馬島教授のお世話になっていますが、四月下旬には手術をうけることになっています。今の体調なれば、まだまだ川柳界に報恩出来そうです。

平山さんの作品は全体に理屈っぽい。小寺さん、長内さん、大橋さんの作品は、報告調と説明の句が多いから注意して下さい。添削した作品と原句を比べて勉強して下さい。現在のところでは茅部さんの作品が光っています。北柳吟社の句会を中心にして勉強に励んで下さい。読む、考える、書くこと（作句）は老人ボケを防ぐ秘訣です。終生日記をつける心組みで作句をおつづけ下さい。私が八十三歳になっても、こうしてシャンとして居ることの出来るのは、永い作句生活の賜物と感謝しています。

二月句会　北柳吟社

宿題「拝む」　藤久悦選

バスレクは他宗の神に手を合わせ　草人
宿題も叶う大事な心の和　子面坊
初詣で振袖着せた孫拝み　徳生
拝むよな心に救急車のランプ　ゆきを
金策へ拝みますよとかしこまり　明子
遭難者帰らぬ海へ掌を合わせ　娘雀
カマクラの神棚拝み子等燥ぎ　金星
日に三度合掌をして箸を取り　昇月
七五三それぞれ小なさ手を合わせ　やす

神拝む心永遠に欲しいもの　徳生
拝む手に感謝の心通じ合い　（職員）恵美子
お先祖を拝む読経の朝な夕　ゆきを
ベッドから礼拝すます日曜日　千秋
心から悔いて十字架伏し拝み　娘雀

五客

拝んでも怒濤虚しい北の海　聖一
石段の前から拝む車椅子　ゆきを
黙禱をして生前へ声をかけ　（青森）草兵
高松宮へ麻痺した掌を合わせ　（青森）草兵
仏像の慈顔心を和ませる　（青森）久五郎

人位

辻地蔵ここでも老婆掌を合わせ　昇月

地位

合掌の心を乱す欲の皮　草人

天位

どら息子仏間に座る用が出来　（青森）草兵

宿題「瓶」　杉野草兵選

前抜

薬びん見つめて癒える春を待つ　千秋

ポケット瓶夜行列車の夢に乗せ　久悦

酔っぱらって我が身転んで瓶を立て　徳生

応接間見せたいラベルビン並び　（職員）興

飯時に使う尿器を詫びてとり　千秋

独り者瓶のラッキョウ語りかけ　（職員）興

洋酒かと思う瓶から梅酒酌ぐ　（青森）久五郎

牛乳瓶病友を励ます春を告げ　娘雀

水薬の苦さに悔いる不養生　草人

瓶にしゅんの香りをしまい込み　（職員）恵美子

競走のサイダーむせるラッパ飲み　明子

瓶注ぎで友と交わした懐かしさ　金星

アクションの瓶頭脛骨割らず済み　久悦

空びんをふって呑んべい末練なり　草人

空瓶を集めて寄付する子の姿　（職員）恵美子

一升瓶立てご機嫌な友だった　子面坊

酒の瓶喜怒哀楽に使用され　蘭甫

瓶で米ついた記憶の負けいくさ　ゆきを

聖母像花瓶いっぱいバラ溢れ　やす

五客

哺乳瓶母乳を知らぬ子に育て　（青森）久五郎

瓶詰の竹の子が来る故郷の味　金星

荒海に凶を封じた瓶放つ　興

空瓶を拾う手があり幸とする　聖一

一升瓶たてて父子の水入らず　娘雀

人位

牛乳瓶に花一輪のあるベッド　ゆきを

地位

瓶の中季節不在の水中花　聖一

天位

薬瓶癒えたベッドに忘れられ　明子

席題「暖冬」一点　互選

暖冬で漬菜がすっぱくなっていた　ゆきを

暖冬へあせりをみせる農事メモ　久悦

暖冬の季節忘れて花が咲き　（職員）恵美子

暖冬と言われて見ても今朝の雪　草人

暖冬で不況呼んでるスキー場　金星

大自然売り上げ税を知る暖冬　聖一

二点

暖冬へ迷子のような蕗の苔　（青森）草兵

食欲がない暖冬の雪ダルマ　（青森）草兵

暖冬の雪像たらりたらり汗　ゆきを

暖冬へ雪像みだしなみ崩し　久悦

シンガポール・インドネシアの十日間 (二)

――らい事情視察研修に参加して――

大高 興
(本園内科医長)

トラファルガーらい病院

早速、所長の蕭秋水先生（Dr. seow chew swee）から、らい状況について説明を受けた。以前、この病院は、ミッション関係の人たちの援助によって賄われて来たが、現在は資金の大部分を政府から仰いでいる。歴史的には、一九二七年、イギリスが管理していた、らいのコロニーから発足したものと聞く。

この国の患者数は、一九五一～一九八六年までに、約七、〇〇〇人を登録しており、現在治療中の患者は二、二〇〇人。新患者の発生は、年々減少傾向にある。本院でチェックした患者統計では、

	新患登録数	らい菌陽性者数
一九七〇年	一五三人	六〇人
一九七六年	一〇二人	三八人
一九八〇年	六六人	二一人
一九八四年	四三人	二三人
一九八五年	五七人	一六人

個人病院での患者発見数は年間五人前後とのこと。

発病患者100人中の人口比

	結節型	ボーダーライン	類結核型	未定群	総数	人口比率
中国人	24	21	12	1	58	76.4%
マレーシア人	2	4	1	0	7	14.9〃
インド人	6	5	14	1	26	6.4〃
インドネシア人	2	4	3	0	9	2.3〃

発病患者の年齢構成

年齢	患者数
0 － 9	1
10 － 19	8
20 － 29	13
30 － 39	5
40 － 49	8
50 － 59	10
60 －	12

病型分類（57人）

結節型	17
ボーダーライン	21
類結核型	16
未定群	1
※ 神経らい	2

※ 神経肥厚のみ、1年間経過を観察する。

排菌の有無（57人）
菌（＋）……21人
菌（－）……36人

不自由、変形の出現頻度

1980年	66人中	13人	19.7%
1983年	69 〃	6〃	8.7〃
1985年	57 〃	5〃	8.8〃

一九八〇年以降は、バイオプシーをやっているが、菌陽性者は次第に少なくなっている。

シンガポールのらい対策を困難にしているもの

外国から働きにきている人や密航者は二〇～三〇万人（インドネシア、インド、中国、マレーシアなど）いるが、この人たちに、らい患者が多く、病状が悪化してから個人病院に行って発見されるケースもある。したがって、これらの患者の登録は容易でなく、らい対策を困難にしている。

疑わしい患者の場合は、皮膚科でチェックし、スメーアをとる。二カ月間滞在させ、その間に潰瘍（足などに出来やすい）を観察し、らいであれば病院で加療する。当院では、らいの治療にお金は不要。

入院ベッドは男四〇床、女四〇床のほか夫婦室は六九。一階は男性ベッド、二階は女性ベッドにしている。現在男女合わせて二七人入院し、夫婦は九七人入っている。

この病院では、年寄りの患者に対して、庭の芝刈りにはお金を上げているが、雑用程度ではお金を上げていない。

政府からは、入院治療の患者には、お金は一切支給されない。しかし貧しい人や子供が居て働けない人に対しては、生活費や慰安金として救らい協会が少しばかりお金を出してくれている。治療は一切無料であるが、療養給付金は一切無い。これらは保健省の規約によるものである。

在宅患者で働ける人に対しては、働きの程度に応じて、一月二〇五シンガポールドル（日本円で約二四、〇〇〇円）以下の給与が政府から支給される。

らいかどうかの診断は、らいに関係している人達によって決められている。それで、らいと決まれば隔離されるが、若し患者が拒めば、感染予防上から診査をして、強制的に収容するが、これは医師の指示で行われる。

患者が発見されれば、患者の家族、親戚、隣人も診断や検査の対象になるが、そのための受診を断る人は少ない。患者は病室を嫌うので、一般住宅のような造りの家に住まわせている。

国民の八〇％以上は住居がはっきりしているので、もし、らいと診断されて逃げたとしても、発見することが容易である。健康保険のシステムもあるが、シンガポールでは二〇％の加入しかないので、実質的にはあまり恩恵がない。

救らい協会病院

トラファルガーらい病院から、バスで約五分の距離に在る。一二〇人収容で有給の療養所である。この病院の建築資金や運営費の一部を笹川良一氏が援助している。職員は四二名であるが医師の常駐はなく、週に一～二度来る程度である。救らい協会の資金で運営されているが、患者たちは、カゴを作ったり、ミシンによる縫製などを

している。製品は、シンガポールやオーストラリアなどに送られて売られている。工芸品の立派さには驚くばかりである。ほとんどの患者に兎眼もなく目がきれいで握力も非常に強い。神経肥厚の著名な症例はかなり多い。ここでは複合療法も行われている。

我々一行のこの日の昼食は〝ネプチューン海皇〟での中華料理である。ここからの眺めは全くすばらしく、シンガポールで最高の七〇階の白亜のビルをはじめ、空中ケーブルカーや造船所や近代的な大きな橋や遠くマラッカ海峡を隔てて、インドネシアの島々が望見できる。

昼食後、スタンフォード通りにある国立博物館（植民地時代に造られたイギリス風の建物）や植物園を見学した。園内には、ランの種類が多く、さすがに国花にふさわしい豪華さで咲き乱れていた。この国のランは花弁が厚いので花の命も長いといわれる。

午後七時過ぎから九時頃まで行われた、夕食の交歓会は、マンダリンホテル向かいの「チャイナパレスレストラン」において開催された。トラファルガー病院長やシンガポール救らい協会長 Dr. Oon Beng Bee 氏ら、らい関係者数名が招かれ、交歓会にふさわしく盛大であった。夜、高屋教授を訪ねて来られた、シンガポール日本国大使館一等書記官三宅多津次氏と歓談し、二人並んで写真を撮る。

午後十一時就寝したが、なぜかなかなか眠れなかった。

1. シンガポール国のらい
シンガポールのらいは、はじめ中国や印度から伝播したものである。

2. 一九一八年、らい患者用の仮住いが作られた。（らいコロニーか）

3. 一九八一年からＷＨＯによる複合療法が Middle Road病院において実施された。
複合療法としては、

(1) ＢＢ．ＢＬ．ＬＬ型に対して
●ＲＦＰ一日六〇〇mgとして一週間投与。その後は月に一回六〇〇mgを投与する。これを二年間行う。又は菌㈠になるまで行う。
●エチオナミドは一日三七五mg～五〇〇mgとして毎日投与する。

(2) ●ダプソンは一日一〇〇mgとして毎日投与する。
不定群、ＴＴ、ＢＴ、神経らいには、
●ＲＦＰ六〇〇mgを一～六ヵ月投与。
●ダプソン一〇〇mg一日量として六ヵ月間。六ヵ月後に患者を検査（バイオプシーを含む）して、治癒しているかどうかを調べる。もし治癒していない場合は、更に三～五年間治療する。それでも活動性であれば、更にダプソン＋他の薬剤で三年間治療する。

(3) ダプソン耐性らいに対しては、
●ＲＦＰ六〇〇mg一日量とクロホザミン三〇〇mg一日量を一週間用いる。一ヵ月後に菌を検査し、菌㈠に

なっているかどうかを調べる。もし菌(+)であれば、再びこれを繰り返して約二年間行う。

- クロホジン一〇〇mgとエチオナミドを毎日投与。もし副作用が認められれば中止する（なぜならクロホザミンは黒い色素沈着を起こしたり肝臓炎を起こすので）。

(4) らい反応Ⅰ型（リバ…サルルギ…反応（遅延型アレルギ…））に対しては、

- プレドニゾロンとクロホザミンを用いる。

らい反応Ⅱ型（ENL…らい性結節性紅斑（免疫複合物による障害））に対しては、

- プレドニゾロン＋サリドマイド＋クロホザミンを用いる。

4. 一九八五年のらい患者数は七、九〇三名。年々僅かながら減少してきている。

5. らいの管理について

シンガポールは小さい島に二五〇万人住んでいる。そしてその約八〇％の人は公共住宅に入り、定住しているので電話、手紙、訪問などで容易に状況を把握することが出来る。しかし問題なのは、移動労務者が一〇万人以上（マレーシア、フイリピン、タイ、スリランカ、バングラデシュ、インドなど）が入り込んでいて、これらの人によって、らいが持ち込まれるので、その検診や管理は容易でない。

一九六五年に四二、〇〇〇人の学校生徒の検診で、四名だけ発見されている。

◎年齢による分類

	1984	1985	計
0－14才	2	1	3
15－24	7	13	20
25－34	8	10	18
35－44	6	6	12
45－54	5	10	15
55以上	15	17	32

◎シンガポール国におけるらいの新発生

年	計
1982	61人
1983	69〃
1984	43〃
1985	57〃
1986年９月現在	33〃

◎ＴＤＳ耐性の発生頻度

	総　数	再ねん	百分率
1980	7688	7	0.09
1985	7903	8	0.10

◎病型による分類（1984－1985）

		1984	1985	計
ＬＬ		17	17	34
ＢＬ	ボーダーライン	4	0	4
ＢＢ	ボーダーライン	0	6	6
ＢＴ	ボーダーライン	8	15	23
ＴＴ		10	16	26
神経らい		3	2	5
不定群		1	1	2
合　計		43	57	100

◎ＴＤＳ耐性患者数

	新患から	治療継続者から	計
1982	3	26	29
1983	2	11	13
1984	0	9	9
1985	0	8	8
1986	1	6	7

◎ＣＤＴによる肝臓炎　148例中　19例発生＝12.8％

◎活動性患者数

	活動性	患者総数	百分率
1980	2,611人	10,367人	4.0
1985	2,207	7,903	3.6

◎活動性（菌＋）で治療せる患者数

1983年…… 2,290人

1984年…… 2,260〃

1985年…… 2,207〃

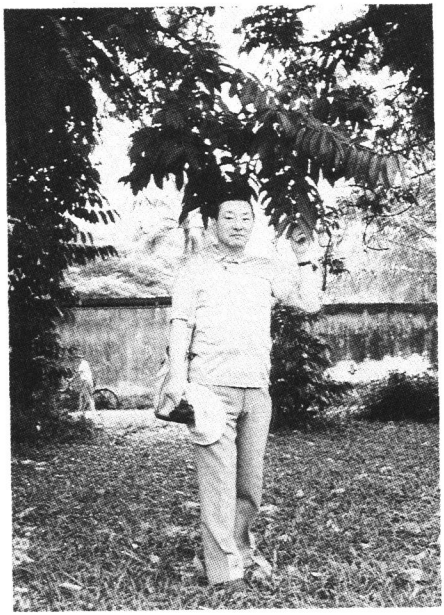
1986年…（5/31現在）…… 2,148〃

◎患者の近戚、親兄弟の検査（5年間検診）

	新　患	家　族	検査数
1980	66	2	1180
1985	57	4	120

(註) 保健婦が家族に接触して調査を行っている。
◎印はシンガポール全体。

●尚、耐性検査はロンドンでチェックしている。
●エチオナマイドはそんなに多く使われていない。
●一九七六年に伝染病予防法が出来てから資料も充実してきた。
●小児患者の義務教育について…ここの病院内にも学校はあるが、現在閉鎖されていて、他の一般の学校に入学している。それで現在、子供たちはここの病院には居ない。
●らい患者の死体解剖はやっていない。もしどうしても必要な場合は、他の大病院にお願いすることにしている。



左・シンガポール・トラファルガハンセン病病院の構内の大楓子の大木の下で撮る大高先生・上・同・大楓子の実―。

身延のかがり火、(十一)

―ハ病の救聖僧綱脇上人伝―

野中武祉

―あれは十数年前のことである。

綱脇上人が福井県の妙泰寺に居た頃、同じ村に住む農夫がライに罹り、富士の裾野へ夜逃げして外国人の開墾の手伝いをしている…という話を、地元の医者から聞いた事があった。

その話を、救ライ事業を始めるに当って彼は俄かに思い出したのである。出来ればライ患者を救済しているという外国人に会い、参考迄に施設の見学をしてみたい…と思いたったのだ。

だが、富士の裾野といっても広大で、どこにその施設があるものか、詳しいことは何も解からない。

そこでまずは山梨県下の裏富士の裾野一帯を、松本上人の道案内によって捜してみる事にしたのである。

見知らぬ町や村を訪れて聞き廻ったが、

「外国人が運営する救ライ病院なんて、知りませんな…」

と言う返事ばかりが返ってきた。

或る日、草深い村落へ入っていくと、意外にもキリスト教会が建っていたので、そこの若い牧師に尋ねてみると、

「東京の目黒という所に、外国人が運営するライ病院がありますが、富士の裾野でのライ病院はまったく知りません」

とのことである。

裏富士の裾野一帯を一週間ばかりも捜し廻ったが、一向に見付からなかった。これはもしかしたら、静岡県下の表富士にあるのではあるまいか?綱脇上人は裏富士での探索を止めてそう思ったものだ。

一方、総本山の法首豊永上人の帰山を待ちこがれていたが、なかなか帰山してこなかった。聞くところによると、帰山はいつになるか解からないと言う。

いつ迄も身延山で無為に過ごしている訳にもいかず、またライ病院建設の相談とその認可を早くに得たいとの思いから、彼は八月六日に東海道線を利用して東京へ発った。東京に居る法首を、尋ねる事にしたのである。

彼は上京の途中、静岡県の御殿場町(市)で下車した。表富士の中心地は御殿場である。上京の次いでに、御殿場を中心に外国人が運営する救ライ施設を捜してみようと思ったのである。

夏の陽が輝く駅前の通りには、旅行者や町の人々が賑わい歩いていた。

「一寸お尋ね致します。富士の裾野において救ライ活動をする外国人がおるそうですが、ご存知ありませんか?」

綱脇上人は、駅前を通りかかった着物姿の上品な中年

の婦人を呼び止めて聞いた。
「ああ、存じております。この町の吾妻街道を二里半ばかり下った地点に、神山という所があります。そこにカトリックの救ライ病院がご在います…」
カトリックの信者でもあるのか、婦人は詳しくしかも丁寧に教えて呉れた。
教られた道を進んでいくと、間もなく町はずれに至る。そこからは草深い丘陵地が続く。丘陵地を二時間ばかり歩いた頃、農家や畑や竹林が所々に見えるというような辺鄙な地点に至った。
そんな一郭に婦人が言ったように、救ライ施設があった。丸太を立てただけの門柱に『復生病院』と筆書きしてある。農家のような大きな建物が七戸ばかり一かたまりに建っている。それが病院で、一見したところとても病院とは思われなかった。
一人の四十歳前後の男が、病院内の事務所に詰めていた。その男に綱脇上人は自己紹介をし、訳を話し、参考迄に院内を見学させて欲しい…と申し出た。
「よろしいですよ」
救ライ活動を始めるという綱脇上人の目的を理解したのか、事務員は快く応えたものだ。
「ところで、この病院はいつ頃、どんな人によって創立されたのですか。また患者さんの生活は、どのようにしておるのですか？」
見学に入る前に、綱脇上人は柔和な男に質問を浴びせた。
「この病院は明治二十一年に、テストヴィドというフランス人のカトリックの宣教師が創立したものです。テストヴィド神父さんは既に亡くなられて、現在は三代目のベルトラン神父さんが院長をしております。現在患者さんを八十二名ばかり収容しておりますが、生活は出来るだけ自給自足にしようと、神父さんを始め患者が一丸となって牛馬を飼い、畑を耕し、平穏な暮しを営んでおります」
事務員から説明を聞いた綱脇上人は、「そうですか」と言って、合理的な運営方式に感服すると共に、今後大いに役立つと思ったことである。
―事務員が言ったように、復生病院は明治二十一年に創立されたが、ここで特記しておかなければならない事は、この復生病院は外国人が日本において始めて救ライ事業として創設したものである、という点である。これは日本における救ライ事業の、記念すべき先鞭でもあったのだ。
以後、明治二十二年には九州熊本市琵琶崎に、フランス人のコール神父の要請によりマリアの宣教者フランシスコ修道女会が『待労院』を創設している。
更には明治二十七年に、東京の目黒にアメリカ人のヤングマン女史によって『慰廃園』が創立され、明治二十八年には、九州熊本市立田山麓にイギリス人のカトリック宣教師ミス・エグ・ハンナ・リデル女史によって『回

春病院』が開設されている。
時代は飛んで大正五年には群馬県草津町湯の沢に、イギリス人の宣教者コンウォール・リー女史が『聖バルナバ病院』を創設している。
このように復生病院が創立されて以来、集中的に外国人の宣教師らによって救ライ施設が続々と誕生したのであるが、何故そのような現象が起ったのであろうか。それは次のような理由に依っている。
明治維新後徳川幕府が執り続けてきた鎖国政策は解かれ、外国文化や外国人が日本国へ容易に入れるようになった。特にキリスト教の宣教師や牧師が各国から渡来してきて、布教活動を精力的に展開するようになった。
そんな折りに、世間から放置されていた悲惨なライ患者を目の当りにし、見過ごすことが出来ず、幾人かの宣教師や牧師は施設を創り、その救済に乗り出したのである。また彼等の慈善事業の着手は、母国の強大なキリスト教団をバックに比較的容易であったもののようである。
それに較べ、明治時代の当時の日本は非常に貧しく、政府も宗教団体も流浪生活を送るライ患者の救済にまったく着手していなかった。そうした世情の中で、綱脇上人が日本の宗教会を代表するような形で、ライ患者の救済に敢然として立ち向ったのであった。
—中年の事務員は一通り院内の状況を説明したあと、外へ出てゆき、すぐに一人の男の患者を事務所に連れてきた。そして、
「上人様が施設の見学をするので、案内をするように—」
と言い渡した。
背の高い男の患者は、三十歳前後で角張った顔をしている。その顔はどこにも狂いはない。ただ左手の五本の指が変形しているように見受けられた。
病気の軽症な男と共に綱脇上人は事務室を出、木造藁葺屋根の大きな病室に入った。病室は、古い畳敷きの大部屋になっている。大部屋の隅に布団が幾組みもたたんで置かれ、二つばかりの茶箪笥も置いてある。薄暗い大部屋に雑談をする二、三人の盲人がいるだけで、妙にひっそりしていた。
「ここは男子の患者を収容する病室で、皆んな共同生活を致しております。動ける患者は外仕事に出ているのです」
と、案内の男は言う。
大部屋に残っている盲人達の頭や手足に包帯が巻かれ、治療はかなり行き届いているように思われた。
男子病室を視察してから、女子病室も見学させて貰う。女子病室も男子病室と同じであったが、ただ相違する点は女子病室の方が小綺麗にされている事であった。
各病室を視察してから、馬小屋と牛舎を見せて貰らおうと、綱脇上人は案内人と一緒に陽当りのよい外へ出た。
院内を歩いて行くと、病室の横で二、三十人の老若男女の患者が石垣造りをしているのに出合った。石垣造り

をする患者の中に、六尺近いと思われる赤毛の大男がいた。

「あのお方が、ベルトラン神父さんです」

と、案内の男は言う。その時神父がこちらを振り向いて若い僧侶に気付くと、珍しいものでも見るようにじいっと見入ってきた。

「こんにちは。突然施設見学に訪ずれました…」

神父に近寄った綱脇上人は、英会話が苦手なので日本語で挨拶を述べて、丁寧に頭を下げた。すると神父も日本語を思うようにしゃべれないらしく、にこやかな表情を浮かべたかと思うとぎこちなく頭を上げてきた。

神父との応対は、それのみで終った。

「ここの場所に昔七、八戸の村落があったのですが、それを初代の神父様が全部買い取って、現在の病院に改造したのだそうです」

案内人は蓄舎へ案内する道々説明する。

〈成程〉それで建物の屋根がいずれも藁葺なのか…と綱脇上人はようやくに合点がいったことであった。

「私共患者にとりまして、ここは実に住み良い所であります。安心して身心を休められます。ですが、いつ迄ここに居られるかどうか解りません…」

案内の男は、表情を曇らせて言う。

「それは一体どういう事なんです。神父さんが近い内に施設の運営を、止めるとでもいうのですか?」

綱脇上人が改まって聞く。

「いえ、そうじゃありません。政府が近い将来ライ患者を集めて遠方の小島へ送り、永久に隔離するというような計画を持っているらしいのです。そんな噂があるのです」

「ほう、そんな計画があるのですか!」

男から説明を聞いた途端に、綱脇上人の心は騒いだ。救ライ事業を興そうとしている矢先きであるだけに、案内人の話は聞き捨てならぬものがあったのだ。

政府が本当にライ対策の計画を持っているのなら、己れがやろうとしている救ライ事業を、中止しなければならない。だがこれはあく迄も噂であると言う。

噂の真偽を確める必要から、東京へ行ったら是非内務省を尋ねてみよう…と、彼の胸中にはそんな思いが俄かに湧き上ったことである。

復生病院の見学を終えてそこを出たのは、夕方の五時近くであったろうか。

東京へ行く最終列車に間に合わそうと、夕日が明るい草深い道を足早やに歩いた。

歩いている内に、前方遠くの丘陵地に黒煙を吹き上げてのろのろ走っていく蒸気機関車が見え、綱脇上人は〈しまった!〉と思ったことである。

その夜、止むなく御殿場に投宿する。

（つづく）

園日誌　○印 自治会

一月中

1日　安野嘉彦会長外三名来園（天理教会）
〃　佐藤忠男司祭来園（聖ミカエル教会）
〃　デュベ・ジル神父来園（カトリック教会）他五回
3日○男（七十二歳）亡　青森県
5日　ご用始め　年始交換（職員・入園者）
6日　高橋博先生来園（眼科）他六回
〃　滝田順一先生来園（耳鼻科）他八回
7日　福士六郎先生来園（内科）他三回
8日　竹村竜治先生来園（婦人科）他一回
〃　中山年道先生来園（松丘聖生会）他二回
〃○保健科集会開催
10日　准看護学校冬休み終了
〃　青森県准看護婦養成所看護教員研究協議会（青森教育会館）
〃○女（七十一歳）亡　秋田県
13日　准看護学校二年生卒業試験開始（1月30日まで）
〃　物故者告別式（楓林寺）
14日○地区連絡係集会開催
15日　コールド・ウェル兄外十名来園（松丘聖生会）
16日　安野嘉彦会長外六名来園（天理教会）
17日　片桐氏、高橋氏、山形氏来園（カトリック教会）
19日　金重栄二先生来園（松丘聖生会）
20日　中谷先生来園（外科）
24日　太田氏、芳賀氏来園（カトリック教会）
26日　国立らい療養所事務長会議（東京・26日～29日）
27日○監査始まる
29日　青森県知事選挙不在者投票
〃　石田吉男先生来園（松丘聖生会）
〃○監査終了
31日　六十二年度准看志願者願書受付（2月20日まで）
〃　山形氏、カナダ神父来園（カトリック教会）

二月中

1日　青森県知事選挙
2日○男（八十四歳）亡　北海道
〃○地区連絡係集会開催
3日　高橋博先生来園（眼科）他六回
〃　滝田順一先生来園（耳鼻科）他六回
〃　物故者告別式（楓林寺）
〃○高松宮様御逝去により読売新聞社阿部文彦記者取材に見える
4日　福士六郎先生来園（内科）他二回
〃　デュベ・ジル神父来園（カトリック教会）他六回
〃○らい予防法検討委員会開催
5日　竹村竜治先生来園（婦人科）他一回
〃　米沢紀弘前学院大学教授来園

昭和五年二月十日創刊　第五十八巻　第三号　通巻五百十二号　松丘保養園

松丘保養園案内　(S.62. 4.17現在)

所在地	青森市大字石江字平山19
園長	阿部　鹿次郎
正職員数	183名（男 61名、女122名）
賃金職員数	59名（男 19名、女 40名）
入園者現在数	427（男220名、女207名）
敷地及建坪	敷地230,548平方メートル、建坪24,664平方メートル 延坪26,459平方メートル

（松丘聖生会）

〃　治療棟移転開始

6日　所長連盟東北支部臨時総会（盛岡）

7日　佐藤忠男司祭来園（聖ミカエル教会）他四回

〃　山形、太田、芳賀、田川諸先生来園（カトリック教会）

8日　中山年道先生来園（松丘聖生会）他二回

9日　新管理治療棟オープン。修祓式

11日　篠田教会七名、好善社十一名（除雪ワークキャンプ）来園　カトリック教会

12日○地区連絡係定例集会開催

16日　安野嘉彦会長来園（天理教会）

〃　○特重寮入居者との話合い

17日　中谷先生来園（外科）

〃　○会員懇談会開催

18日○予算説明、施設交渉

〃　○独身重不自由寮入居者との話合い

19日　コールド・ウェル兄来園（松丘聖生会）

22日　青森県准看護婦資格試験（青森西高校）

24日　六十二年度国立らい療養所看護協同研究班会議（東京）

〃　石田吉男先生来園（松丘聖生会）

25日○全医労と四週六休、他三件についての話合い

28日　ベンサン神父、山形、芳賀、金安諸先生来園（カトリック教会）

〃　○新良田教室閉校式に会長出席

発行所　財団法人　松丘保養園慰安会
（郵便番号　〇三〇―〇二一）
所在地　青森市大字石江字平山十九番地
（電話(0177)㊀〇一四五・〇一四六）
振替番号　松丘保養園慰安会内・申田の裾編集局
盛岡　四―六一七八
発行人　阿部　鹿次郎
編集人　天地　聖一
印刷所　青森市大字幸畑字松元六二ノ三
青森コロニー印刷
電話（代）㊀二〇二一番
定価二三〇円　〒二二〇円